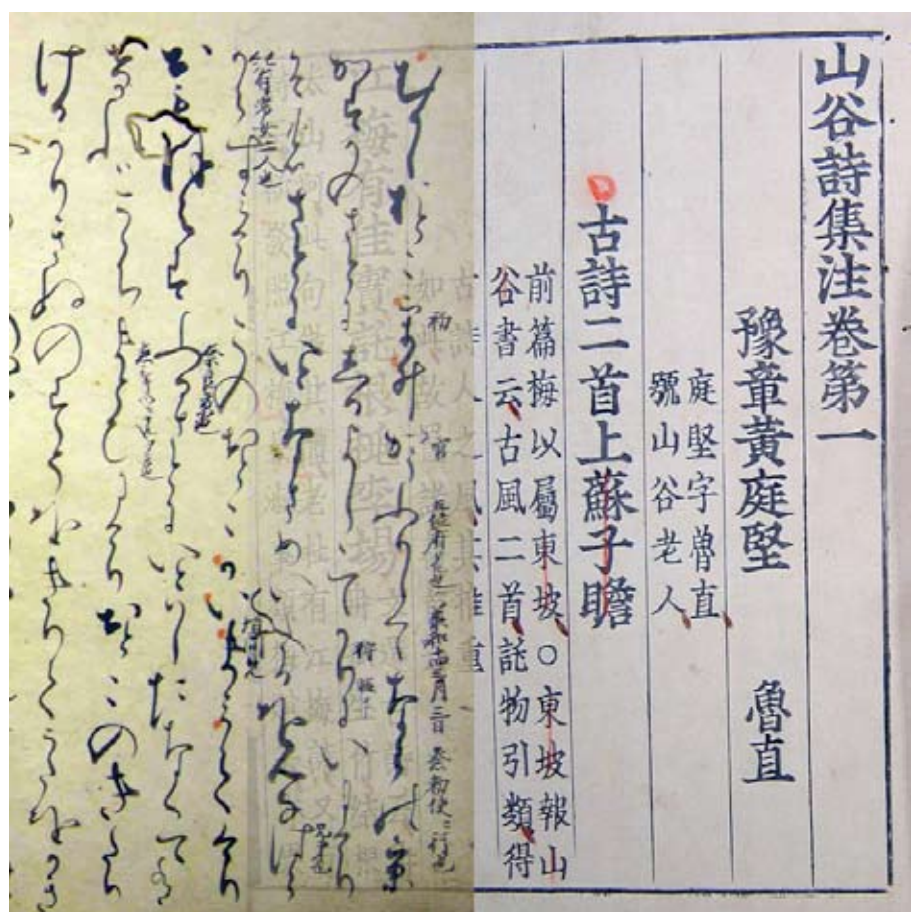


見る・読む・比べる

—ドキュメンテーション学科による古典籍へのアプローチ—



期間：平成18年10月25日（水）～11月10日（金）

ごあいさつ

鶴見大学文学部に4番目の学科としてドキュメンテーション学科が発足して3年目になります。図書館学をベースとし、情報学中心のデジタルドキュメンテーション（DD）コースと古典籍の書誌学を中心とするライブラリーアーカイブ（LA）コースを設けて、過去・現在・未来の情報を扱える学生を育てようというのがこの学科の目標です。平成16年4月に入学した第1期生が3年生となり、それぞれ希望のコースを選択して専門的な授業を受け始めました。LAコースの中心的な科目である古版本演習と古写本演習は、毎週本学図書館の貴重書を使って行っています。学生はまだまだ初歩的な調査しかできませんが、一応は古典籍の扱いにも慣れてきたところです。今回の展示では演習に参加している学生の調査カードに基づいて、担当教員が文章にまとめて解説としました。

（堀川貴司・伊倉史人）

展示書目

第一部「古版本演習」から

1.	山谷詩集注	古活字版	二〇巻目録一卷・一一冊
2.	添品妙法蓮華經	天海版	八巻・八冊
(参考)	普門品（妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五）		一卷・一帖
3 A.	鎮州臨濟慧照禪師語録（臨濟録）	寛永10年（1633）京都・中野市右衛門刊	一冊
3 B.	鎮州臨濟慧照禪師語録（臨濟録）	正保3年（1646）京都・麩屋甚右衛門刊	一冊
3 C.	鎮州臨濟慧照禪師語録（臨濟録）	慶安元年（1648）刊	一冊
3 D.	鎮州臨濟慧照禪師語録（臨濟録）	万治3年（1660）京都・飯田忠兵衛刊（首書本）	一冊
3 E.	鎮州臨濟慧照禪師語録（臨濟録）	貞享2年（1685）京都・梅村弥白刊	一冊
3 F.	鎮州臨濟慧照禪師語録（臨濟録）	元禄12年（1699）京都・文台屋治郎兵衛刊（首書本）	二冊
4.	本朝百将伝	明暦2年（1656）大西与三左衛門俊光刊	二巻二冊
5.	長恨歌図抄	延宝5年（1677）編者易亭主人自跋	五巻五冊
6 A.	八幡太郎一代記	〔江戸中期〕〔江戸・鶴屋喜右衛門〕刊	五巻五冊
6 B.	八幡太郎一代記	〔江戸中期〕〔江戸・鶴屋喜右衛門〕刊	五巻合一冊
7	小山林堂書画文房図録	嘉永7年（=安政元年、1854）江戸・須原屋伊八刊	一〇巻一〇冊
8 A.	都名所図会	天明6年（一七八六）京・芳野屋為八刊	欠四巻四冊（巻一、五欠）
8 B.	都名所図会	〔江戸後期〕京・林芳兵衛刊	六巻六冊
9 A.	日本書籍考	寛文7年（1667）京都・荒川宗長刊	一冊
9 B.	本書籍考 経典題説合刻本	文化13年（1816）大坂・多田勘兵衛印	一冊
10.	新編書籍名数	天明元年（1781）京・文台屋次郎兵衛刊	三冊
11.	玉造小町子将衰書	寛永20年（1643）京都・林甚右衛門刊	一冊

第二部「古写本演習」から

12.	伊勢物語	〔近世初〕写	一帖
13.	伊勢物語	〔江戸前期〕写	二帖
14.	詞花和歌集	〔江戸前期〕写	一帖
15.	詞花和歌集	〔江戸中期〕写	一帖
16.	伊勢物語	元禄2年（1689）源正武写	一冊
17.	玄々集	天保9年（1838）写	一冊
(参考)	玄々集	〔江戸前期〕刊	一冊
18.	伊勢物語	〔室町後期〕写・〔山崎宗鑑〕筆	一帖
19.	伊勢物語	〔近世初〕写・〔近衛信尹〕筆	一帖
20.	為尹千首	〔江戸前期〕写	一冊
21.	水無瀬釣殿六首歌合	〔江戸前期〕写	一帖

第一部 古版本演習から——江戸時代の出版

日本における書物の出版は、古く平安時代にまで遡りますが、江戸時代以前はほとんどが仏教経典もしくは漢籍であり、寺院などで学問をする人たちのために少数数刊行されるものであって、広く一般に販売されることはありませんでした。しかし戦国時代が終わり、平和が訪れると、僧侶以外にも貴族や武士の間で学問や文芸に対する関心が高まり、その要求に応じてさまざまな書物が刊行されるようになります。また、次第に庶民向けの内容の出版物も現れます。こうして本格的な商業出版が発達していきました。

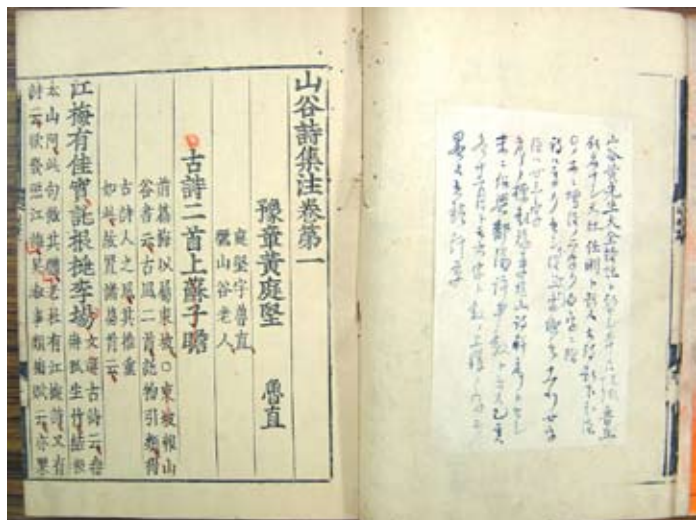
江戸時代の出版のさまざまな側面を紹介したいと思います。

古活字版と初期整版

安土桃山時代、キリスト教宣教師によって持ち込まれた西洋の活字印刷、豊臣秀吉の朝鮮侵略によって戦利品としてもたらされた朝鮮の活字印刷、この二つの技術が融合して日本における活字印刷が17世紀の前半、非常に盛んに行われます。一方、室町時代以来、禅宗寺院において行われていた整版（板木）による印刷も続いていました。結局活字印刷は17世紀後半には下火になり、ほとんどが整版印刷になってしまいます。その原因は、日本の文字や表記の多様性にあるようです。西洋ならアルファベットと少数の記号だけで全てを表記できますので活字の種類は少なく済みます。朝鮮はほとんどが漢文の書物ですが、すべて白文なので活字を組むのが簡単です。それに対して日本は文字の種類が多く、漢文の場合も送り点や送り仮名を付けるため、整版の方が自由にレイアウトできるのです。また、板木は一度作ってしまえば長期間にわたって増刷することが可能なので、商業的には有利です。ここでは商業出版が始まる前の古活字版を2点、商業出版が始まり盛んになっていった頃の整版本を6点紹介します。

1. 山谷詩集注 20巻目録1巻11冊

後補丹表紙 28.7×20.9 糎。後補題簽墨書「黄太史 目録（一之二～十九之廿）」。四周单辺 22.6×17.0 糎、有界8行16字、注小字双行、版心粗黒口下向双黒魚尾「山谷幾（巻数）幾（丁数）」。第1冊は目録、第2冊に原序および巻1・2、以下各冊2巻ずつを取める。第2・3冊は料紙が斐紙。書き入れは第2冊から第4冊にかけて朱の句点・豎点・朱引・押韻を示す圈点が全体に、朱墨の返点・送仮名・注記が一部に、黄の句点が一部にある。印記「不忍文庫」（屋代弘賢）「阿波国文庫」（蜂須賀家）。この二つの印は朱の色が同じであり、また第5冊巻首には上下に並ぶ両印全体に懸かる当て紙が残っている。すなわち



同時に押捺したものと考えられる。第2冊原序第5丁裏に貼り紙があり、青書にて元版『山谷黄先生大全詩註』との版式の異同を記す。屋代弘賢筆か。本書は川瀬一馬『増補古活字版の研究』の分類で第一種本（慶元中刊）とされるもので、同書には東洋文庫・建仁寺両足院・日光天海蔵・旧安田文庫（後に小汀文庫）の4本を挙げるが、本書は記録されていない。五山版をもとにした、慶長・元和年間の刊行で、6種ある古活字版のうち最も早い。

版面を注意深く観察すると、ところどころ文字の訂正が行われているのがわかる。元の字を擦り消した上に活字を押捺しているもの、同じく手書きのもの、上から貼り紙をして手書きのもの、元の字を切り取って印刷した字を貼ったもの、などがある。手書きの場合は後の所蔵者が行った可能性もあるが、印刷あるいは押捺のものは刊行時の訂正であろう。

丹表紙は通常江戸初期の書物に見られるもので、本書も一見原表紙かと思われるが、欄外の書き入れの先端が失われているところがあり、明らかに化粧裁ちをしている。丹の色もやや薄い。屋代あたりが誂えたものであろう。

2. 添品妙法蓮華經 8巻8冊

参考…普門品（妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五） 1巻1帖

原裝紙粉色無地表紙 28.7×21.1
 糰。後補題簽墨書「添品妙法蓮華經
 一（～八）。天地単辺（左右は匡郭ナシ）
 22.1糰、無界12行17字、注（音義
 のみ）小字双行、版心白口無魚尾「樹 添
 品法華卷幾 幾（丁数）。巻2・4は各面
 12行のうち6行目と7行目の間隔が他よ
 り広い。1面6行の折本に仕立てるためか
 （しかしそれならなげ他の6巻はそうなっ
 ていないのか不審）。刊記「奉再興仏説一
 切経蔵／今上皇帝玉体安穩／東照権現倍増
 威光／征夷大將軍左大臣源家光公武運長久
 ／四海泰平国家豊饒／仏法紹隆／利益無窮
 ／日本武州江戸東叡山／山門三院執行探題



刊記



巻首

前毘沙門堂門跡／大僧正天海願主／寛永十五戊寅曆五月朔日／林氏幸宿花溪居士／栞行」。徳川家康のブレンだった天台宗の僧侶天海が江戸・上野の寛永寺において刊行したいわゆる天海版一切経の一つ。日本で最初の一切経刊行として著名であり、その時使用した活字が現在も寛永寺に保存されている。多くは折本の形だが本書は袋綴（五つ目綴）である。印記「江戸下谷口福／寿永寺蔵書／不許□□□」（上から別の印が捺されていて読めない）「不許／超倫蔵／出門」「貞道」「感随」「戊戌」「无礙菴」（今泉雄作）、また第1冊・8冊に「元禄八乙亥二月求之 昌春日誉（花押）」の識語あり。

法華経には三種類の漢訳が現存し、本書はその中で最後に成立したもの。『妙法蓮華経』に無かった品を加えたので「添品」と称した（現行の『妙法蓮華経』にはその部分が増補されている）。なお、本書は本来7巻であり、なぜ8巻になっているのかは未詳。

参考に展示したのは、大正5年（1916）に保存されていた活字を使用して普門品（通称「観音経」）のみを千部刊行したもので、本書には当時の輪王寺門跡大照円朗の識語が書き入れられている（ただし署名のみ自筆か）。

3. 鎮州臨濟慧照禪師語録（臨濟録） 1冊

- A 寛永10年（1633）京都・中野市右衛門刊
- B 正保3年（1646）京都・麩屋甚右衛門刊
- C 慶安元年（1648）刊
- D 万治3年（1660）京都・飯田忠兵衛刊（首書本）
- E 貞享2年（1685）京都・梅村弥白刊
- F 元禄12年（1699）京都・文台屋治郎兵衛刊（首書本、2冊）

『臨濟録』は臨濟宗の開祖である唐の禅僧臨濟義玄の語録である。日本においても中世に五山版が出ていて広く読まれた。

まず本文のみのA B C Eを比べてみよう。いずれも返点・送仮名・豎点がある。

Aは四周双辺11行20字、版心粗黒口内向双花口魚尾「臨濟録 幾（丁数）」

Bは四周双辺11行20字、版心粗黒口内向双花口魚尾「臨濟録 幾（丁数）」

Cは四周双辺11行20字、版心粗黒口無魚尾「臨 幾（丁数）」

Eは四周単辺8行18字、版心大黒口（下部のみ）無魚尾「〈支那／撰述〉 臨濟録 幾（丁数）」

AとBは版式が同じなので、刊記を改変しただけの同版本かと思ってしまうが、よく見ると線の太さや文字の形が微妙に異なっている。Aを用いた「かぶせ彫り」（本をぼらし各丁を板木に裏返しに貼り付けて彫る。覆刻ともいう）である。これらは、南北朝時代に刊行された五山版をもとにして返り点、送り仮名を施したものである。



A 刊記



A 卷首



B 刊記



B 卷首



C 刊記



C 卷首



D 刊記



D 卷首



E 刊記



E 卷首



F 卷末刊記



F 卷首

Cは行数・字数は同じだが、版心も文字も明らかにABとは異なる。末尾に「延徳三年(1491)辛亥八月十五日季恭居士鏤梓捨入ノ濃之正法栖雲院」という原刊記があり、室町中期に美濃(岐阜県)の寺院で刊行されたものを元にしたとわかる。

Eは版式が全く異なる上に、文字もいわゆる明朝体になっている。匡郭が丁の表と裏とで独立していて、版心のところにつながっていない、版心上部に「支那撰述」とある、表紙が黄檗色である、などの特徴は、当時中国明代の一切経をもとにして京都宇治の万福寺で刊行されていた黄檗版一切経の体裁と同じものである。

Dは四周单辺、本文を小さく9行13字とし、その周囲の余白に注釈を20行12字(天地通しだと31字)で詰め込んでいる。版心は本文部分のみにあり、ABと同体裁。字体は明朝体である。本書は京都法雲院の蔵書印、「嘉永元(戊申)六月於京師于柳枝軒求焉同事考相添 蔣山韶叟(花押)」「豊後万寿蔵本」という識語、また墨・朱・



F 冊末刊記

青でびっしりと書き入れがあり、寺院における僧侶たちの勉学の様子を伝えている。なお柳枝軒は小川源兵衛とい

う禅宗関係書の出版で著名な版元であり、同時に古書も扱っていたことがこの識語でわかる。

FはDと行数・字数は同じであるが、版心は全体にわたり、最下部に大黒口と上向単黒魚尾が合体したものがあり、「増補臨濟録 ○幾（丁数）」とある。注が大幅に増補されているために丁数が増え、2冊に分けたものだろう。刊記は本文末に「元禄十二（己卯）年六月吉日／花洛書林」とのみあって版元名が空白になっているのと、その後にある「林際録増補鰲頭跋」（元禄12年8月、大智実統。彼の注釈を用いたらしい）の末尾に「花洛書林 文台屋治郎兵衛」とある。この刊記は版元名が「花洛書林」の真下ではなく右側に寄っていて、左にもう一軒あってもよさそうな空白がある。

18世紀初めに、京都・大坂・江戸において本屋仲間（同業者組合）が結成されるまで、版権が確立せず、同内容の書物を他の版元が無断で出版することがよく行われた。需要のある書物は多くの版元が競って出版したため、非常に多くの版種があつて複雑である。本書も、詳しく調査すればもっといろいろとあるであろうが、ここでは本学図書館所蔵の6点のみの比較にとどまる。

絵を楽しむ

本は読むためだけのものではありません。書かれている文字の美しさを鑑賞するのも楽しみの一つですが、絵が入っているとさらに興味を引かれます。ここでは、江戸時代の絵入り本を紹介します。前期の大型本、中期の庶民向け読み物、後期の文人趣味の本と時代や読者層はさまざまですが、それぞれに味わい深いものがあります。

4. 本朝百将伝 2巻2冊

明暦2年（1656）大西与三左衛門俊光刊。神話時代から始まって豊臣秀吉に至るまでの歴代武将100人の肖像と略伝（漢文）を載せる。作者は不明だが、林鶯峰に『異朝百将小伝』という著作があるので、これもあるいは鶯峰か。なお、翌明暦3年には挿絵を替えて『本朝武将伝』と改題したものが刊行されている。

5. 長恨歌図抄 5巻5冊

刊記はなく、延宝5年（1677）編者易亭主人の自跋がある。白居易の長編詩「長恨歌」は平安時代以来日本でも愛読され、絵巻物になったり注釈書が作られたりしている。本書は既存の注釈書に編者の父と編者自身が描いた絵を加えたもので、見開きで35面ある。末尾に三条西実隆作と伝える「長恨歌和文」を付す。

6. 八幡太郎一代記

A 5巻5冊

B 5巻合1冊

刊記はないが、各巻巻頭の欄上に（Aには題籤にも）鶴丸の紋があり、江戸の鶴屋喜右衛門による刊行である。江戸時代中期の子ども向け絵入り読み物で、表紙が赤いものを「赤本」、黒いものを「黒本」と呼び、このように萌葱色（青みがかった黄色）のものを「青本」と呼んでいる。Aは絵題籤が揃っており、巻1を除くと保存もまあまあ良いが、印刷は不鮮明である。Bは巻1の第1丁が欠けており、また5冊を合冊していて、原態を留めていないが、印刷はAに比べると鮮明である。表紙や見返しにいたずら書きがあり、また本文中の絵には朱や墨で彩色を施す。裏表紙に「此主堀氏いよ」と書かれており、女性（子ども？）の蔵書であったことがわかる。

実は『八幡太郎一代記』の鶴屋宇喜右衛門版は2種類存在する。1つは慶應大学、東北大学狩野文庫などに蔵されるもので、会話文を絵の中に混ぜ込んだ黒本



A



B

形式。もう1つは都立中央図書館加賀文庫などの、文章を版面上部にまとめ、地の文を増補した黄表紙形式のものである。本書は後者と一致する) 黒石陽子「黒本『八幡太郎一代記』について」(『叢』24、2003.2)。

7. 小山林堂書画文房図録 10巻10冊

嘉永7年(=安政元年、1854)江戸・須原屋伊八刊。書家として知られ、幕末の三筆の一人に数えられる市河米庵(1779～1858)は、書画骨董の収集家としても知られていた。そのコレクションのなかから、中国の書画や文房具、鏡などの銅製品などを選んで図録にしたもの。中国の文献によって筆者の伝記や作品の考証を行ったり、入手の経緯について述べたりして興味深い。嘉永元年に刊行され、本書は序跋などを増補した再刷本。

板木は移動する

板木(はんぎ)とは、書物を印刷するために、その文字や絵を裏返しにして板に彫ったものですが、これを所有していることがすなわちその本を出版する権利を持っていることになります。別の本屋がその本を出版したいときには、板木を譲り受けなければなりません。刊記その他をよく見ることによってその様子がわかってきます。

8. 都名所図会

A 欠4巻4冊(全6巻の内巻1・5欠)天明6年(1786)京都・芳野屋為八刊

B 6巻6冊 京都・林芳兵衛印

Aは「安永九年子中秋新板/天明六年午初春再板/皇都書林〈京寺町五条通上ル町〉芳野屋為八」、Bは刊記に「書林〈京二条通堺町東へ入町〉林芳兵衛」とある。本書は江戸時代中期から後期にかけて続々と出版された各地の名所図会の先駆けとなったもので、大変好評だったため、途中で改版したり、版元が代わったりしながら長く印刷出版された。『新修京都叢書』第6巻の解説(野間光辰)によると、

ア 吉野屋為八初刻本(安永9年)

イ 同再版本(一部修訂したもの)

ウ 同再刻本(全面的に内容を修訂して新たに版木を彫ったもの。天明6年)

エ 河内屋太助求板本(イの版木を買い取ってそのまま印刷刊行したもの)

オ 同再刻本(ウの内容をさらに修訂して新たに版木を彫ったもの)

カ 永田長兵衛板(内容不明。幕末か)

の6種類が知られる。Aは刊記からわかるようにウに当たるが、Bの刊記はアからカのどれにも該当しない。そこで、野間氏作成の「都名所図会諸本対照表」によって調べてみると、例えば巻3・第23丁にア・イ・エには「牟ヶ谷」とあるのにウ・オにはなく、第76丁にはア・イ・エは「古地谷」「芹生里」の順なのにウ・オは「芹生里」「古地谷」の順、といった相違が見られ、Bは両方ともア・イ・エと一致した。恐らくは、オを刊行した時点で河内屋太助はエの板木が不要になり、林芳兵衛に譲渡したのであろう。



A



B

9. 日本書籍考

A 寛文7年(1667)京都・荒川宗長刊

B 経典題説合刻本、文化13年(1816)大坂・多田勘兵衛印

旧事記(先代旧事本紀)・古事記・日本書紀から太閤記に至るまで、日本の歴史・政治・宗教などに関する書物を簡潔に解説したもの。末尾に「此一冊依或人之求記焉一覽之則可知一部之大概耳/向陽林子(此の一冊、或人の求めに依り焉〈これ〉を記す。之を一覽すれば則ち一部の大概を知るべきのみ)」という著者林鶯峰の自跋がある。

鷲峰は林羅山の息子で、幕府に仕えた儒学者。父の遺志を継いで『本朝通鑑』という日本の通史を完成させた。本書はその副産物とでも言うべきものであろう。Aの版元荒川宗長は京都の本屋で、林家とは姻戚関係にあった。Bは羅山の『經典題説』（中国の古典の解説書）を付して1冊とした



A



B



B全体の刊記

もの。『日本書籍考』の末尾の刊記は、「寛文七丁未年九月上旬」とのみあって、版元名は削除されている。『經典題説』の末尾には「文化十三丙子歳暮冬／摂陽書林 新町西口砂場多田勘兵衛」とある。『日本古典文学大辞典』の解説（柴田光彦）によれば、早くからBの合刻本の形で刊行され、これ以前に大坂・吉文字屋市兵衛の刊記があるもの、宝暦11（1761）年の年記があるものがあり、これ以後では天保5年（1834）や嘉永3年（1850）の年記のあるものもあるようで、長く読まれ続けたことがわかる。

蔵書家・愛書家

江戸の版本は、明治維新以降も江戸の文物を懐かしむ人々によって大事にされてきました。また、学問的な価値があるものは、学者の蔵書となり、その研究を支えてきました。そんな人たちの本に寄せる思いが伝わるものを2点紹介します。

10. 新編書籍名数 3冊

天明元年（1781）京・文台屋次郎兵衛刊。一から百まで、漢籍で書名に数字のあるものを列挙して解説を加えたもの。著者中村治重は先代文台屋次郎兵衛。家業の傍ら書きためた原稿を知人の伊勢屋正三郎と息子が校訂した。恐らくは扱った商品の知識が記述に活かされているのであろう。

印記は「中川氏蔵」（中川得楼）「若樹文庫」（林若樹）「アカキ」「よこ山」（横山重）。上冊表紙貼り紙に「天明元年板新篇書籍名数 半紙本三冊（印記「林氏若樹）」とある。林若樹は蔵書家として著名で、自筆の購入日誌が残っており（『若樹文庫取得書目』青裳堂書店）、その明治41年（1908）4月22日の項に村口書店（東京の古書店。今はない）からの購入書として「新編書籍名数 天明辛丑板／京臨泉堂中村百川治重篇 合一冊」とある。



表紙



冊首

ここで「合一冊」となっていることに注目したい。表紙貼り紙も、現状も3冊である。恐らく丁付などから原態が3冊であると考え、適当な表紙を他の本から流用して分冊したのであろう。中・下冊には元の本の題簽の痕跡がある。上冊にある後補墨書題簽には「新編書籍名数 上中下」とあるので、これは分冊前からのものであろう。横山重は室町から江戸にかけての物語・浄瑠璃などの研究で知られる国文学者で、奈良絵本や西鶴本などの良質のコレクション赤木文庫を形成した（その回想録『書物搜索』に詳しい）が、没後各所に分散している。

11. 玉造小町子将衰書 1冊

寛永20年(1643)京都・林甚右衛門刊。道ばたで物乞い同然の姿で座っている老女が通りがかった人に問われてその身の上を語るという設定の序文と、その内容を詠んだ長編の漢詩とで構成される漢文作品。空海作と伝えられるが、平安中期頃の成立で、本当の作者は不明。

印記「K takashi 蔵」(亀井孝)。見返しに「コノ書故太田晶二郎旧蔵／記念(カタミ)ニ遺族ヨリ恵与ニアヅカル／十一丁ウノ付箋ハ彼ガ手ニカ、ル」とある。太田晶二郎は歴史学者、長年東京大学史料編纂所に勤め、定年後は前田育徳会尊経閣文庫で古典籍の影印事業等に携わった。幅広い学識を持ち、書誌学に関する論考も多い。亀井孝は国語学者、古代から近世にわたる日本語の研究

を行ったが、特に室町から江戸の言葉について関心が深く、その研究資料となる書物を多数収集した。一部は勤務していた成城大学図書館にあるが、多くは没後古書店に引き取られ、こうして本学に所蔵されることとなった。



書入



見返し

第二部 古写本演習から

日本における印刷の歴史は古く奈良時代に遡ることができますが、『古今和歌集』『枕草子』『源氏物語』『徒然草』といった文学作品に限っていえば江戸時代まで出版の対象とはならず、写本として、すなわち人々の手によって写され、読み継がれてきました。版本が(原則的に)一時に同質のものを大量に生み出すのに比して、写本はひとつひとつがユニークな(=唯一の)存在、どれひとつとして同じものはありません。

本文を比べる

書物はひとたび写されると、ほぼ不可避的に本文に変化(誤写や改変)が生じてしまいます。原本(オリジナル)が残っていれば、訂正することができますが、残念ながら多くの作品の原本は失われてしまっています。

現在私たちが『伊勢物語』を読む場合、そのテキストはだいたいにおいて藤原定家が書写した系統の本をもとにしています。しかしながら、諸本を比べてみますと、定家本系統とは異なる本文(本文異同)を有する伝本が少なからず存在することも事実です。12の『伊勢物語』はそうした伝本の1つです。すでに本文異同が生じた原因を探ることも、原本の姿を再現することも困難ですが、このような異なる本文を持つ伝本を比べることが、わずかながら原本に近づく一歩となります。

13の『伊勢物語』は改変の例です。奥書に後人の注記が混入しています。これは意図的なものではなく不注意、内容の無理解によって生じた改変です。一方で、意図的な改変もあります。たとえば著者、編者自らが1度なった作品に1度ならず2度、3度と手を加えることがあります。14、15の『詞花和歌集』に見られる違いは、そうした編纂の過程で生じた可能性が考えられます。

12. 伊勢物語 綴葉装(横本)1帖〔近世初〕写

梔子色地雲菱文様裂表紙18.5×23.8糎。外題なし。見返し、布目地斐紙に縹色桐信夫草文様を刷り出す。内題はなく、本文は1ウより書く。料紙、薄手の斐紙。毎半葉12行。字面高さ、約15.5糎。和歌1首2行書。墨付、4折69丁。遊紙、後1丁(本文とは別筆で「哥百九十六首有」と墨書あり)。奥書なし。勘物なし。

第98段「昔おほきおとゝときこゆる」(天福本「昔おほきおほいまうちきみときこゆる」)、第121段「昔男むめつほより雨にぬれて人のまかりいつるを見て殿上にさふらいけるおりにて」(天福本「昔おとこ梅壺より雨にぬれて人のまかりいつるを見て(以下なし)」)、第125段「つみにゆく道とはかねてきゝしかときのふけふとは

おもはざりしに／といひてつみにみまかりけるとなり」(天福本「つみにゆくみちとはかねてきゝしかときのふけふとはおもはざりしを(以下なし)」等、非定家本系統の古本、大島本、塗籠本等に特徴的な本文が見られる。

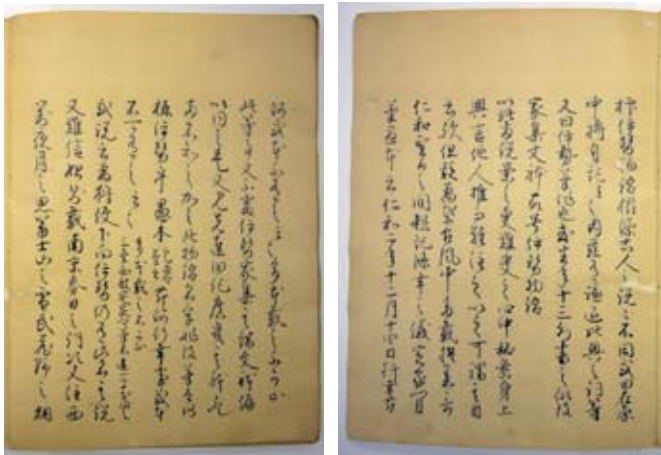
1オに朝倉茂入による極札を貼付する。「誓願寺安楽庵筆〈伊勢物語／横折本〉一冊〔茂入〕」とあり。安楽庵(策伝、1554-1642)は浄土宗西山深草派総本山、京都誓願寺の55世法主。笑咄集『醒睡笑』の著者。但し、自筆の和歌懐紙、書状(の写真)と比較するに、真筆とは認められない。



1.3. 伊勢物語 綴葉装2帖〔江戸前期〕写

紺色地銀泥草花下絵表紙25.1×18.2糎。外題なし。見返し、銀切箔散。内題はなく、本文は1ウより書く。料紙、布目地斐紙。毎半葉9行。字面高さ、約18.0糎。和歌1首2行書。墨付、上册2折33丁、下冊3折49丁。遊紙、上册後1丁、下冊後1丁。下冊は第49段より。印記、「城戸／之印」(方形印刻朱印、上册1ウ、下冊1オ)。

根源本の奥書(下冊48オ～29オ)を有するが、後人の注記が混入する。すなわち、根源本奥書の「…仁和聖日之間粗記臨幸之」の後に「定家卿自／筆愚本云仁和二年十二月十四日行幸芹／／河或本不有之多載之不可正」、「此物語名字非彼筆者何／稱伊勢乎」の後に「愚本〈定家卿／筆之(?)〉芹河行幸事或本／不可有之云々〈多本載之不可正／三条西殿定家卿筆不違一字本同之〉」と注記が混入し、本行と一体化している。「三条西殿」とは実隆(1455-1537)か。実隆筆本の伊勢物語は伝存するものの天福本系統であり、根源本系統の伝本については(不学ゆえ)聞かない。



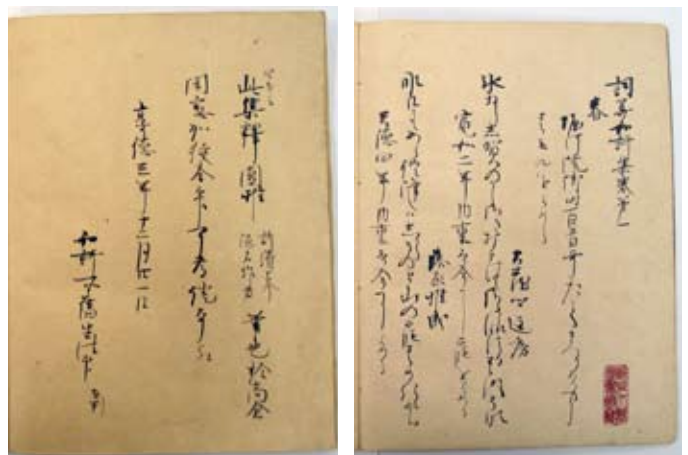
江戸期作成の箱(上蓋中央に「いせものかたり上下二冊」と墨書あり。また右肩に「天／式拾口」と記した貼紙あり)に納められる。いわゆる嫁入本。

1.4. 詞花和歌集 綴葉装1帖〔江戸前期〕写

縹色表紙25.1×18.8糎。外題、表紙左肩に「詞華和調集」と打付書する(本文同筆)。また右下に「勢佑」(未詳)と同筆の署名あり。筆写者か。内題「詞華和調集卷第一(～十)」。料紙、斐紙。毎半葉10行。字面高さ、約20.8糎。和歌1首1行書、詞書は約2字下げに書く。墨付、4折73丁(72丁の73丁の間に白紙1丁あり)。遊紙、前後各1丁。

巻末に「写本云／此集釋圓雅〈新續古今／隱名作者〉筆也於高倉／閑窓加校合畢可為證本坎／享徳三年十二月廿一日／和調所舊生法印在判」と本奥書あり。「和調所舊生法印」は堯孝(1139-1455)か。享徳三年(1454)に円雅筆本を書写せる由を伝える。同じ奥書を有する伝本に国文学研究資料館蔵本がある。

初撰本と二度本との分類基準(井上宗雄氏『天理図書館善本叢書 後撰和歌集 別本／詞花和歌集』解題等の分類)となる6首(新編国歌大観番号:8、11、199、239、379、403)すべてを欠き、その他1首(33)も欠く。一方、新編国歌大観本(底本:高松宮本)に存在しない「長元八年氏前太政大臣家の哥合によめる 大藏卿匡房／君が代はかきりもあらしみかさ山みねの朝日のさゝんかきりは」(一六三の次)「天喜四年四



月晦日后宮哥合によませ給ける 後冷泉院御製／長濱の真砂のかすも何ならしつきせすみゆる君か御代哉」(167の次)の2首を有する(この2首は『金葉和歌集』〈初度本～三奏本〉に入集するもので、最終的には除かれたと考えられる)。また、263番歌を169番歌の次に重出する。以上の特徴から、本書は二度本系統であるが、精撰の過程途次の特徴をもつ伝本と考えられる(井上氏分類の二度本系統(二)の(ア))。

『詞花和歌集』は第6番目の勅撰和歌集。撰者は藤原顕輔(1090-1155)。天養元年(1144)崇徳上皇の院宣を奉じ、仁平元年(1151)に完成、初度本を撰進したと推定される。

15. 詞花和調集(二一代集之内) 綴葉装1帖〔江戸中期〕写

支子色地宝尽文様緞子表紙(前)緑色地青海波梅花文様緞子表紙(後)23.8×17.4糎。外題、表紙左肩金砂子散斐紙短冊「詞花集 全」(本文別筆)。見返し、金銀切箔砂子散。内題、「詞花和調集巻第一(～十)」。料紙、斐紙。毎半葉10行。字面高さ、約19.3糎。和歌1首1行書、詞書は約2字下げに書く。墨付、4折74丁。遊紙、前後各1丁。奥書はない。

先にあげた分類基準となる6首のうち4首(8、239はあり)を欠く。その他に4首(16、39、352歌及び353詞書・作者、355作者・歌および355詞書)も欠く(後2例は、単純な目移りによる誤脱)。また、新編国歌大観本に存在しない前掲2首を有する。その他、156、156番歌の歌順が逆転するといった特徴がある。以上から、本書は前書と同様精撰過程途次の特徴を有する伝本であるが、より初度本に近い系統の伝本(井上氏分類の初度本系統(三)の(ア))に分類されると考えられる(近世期の流布本に多い)。

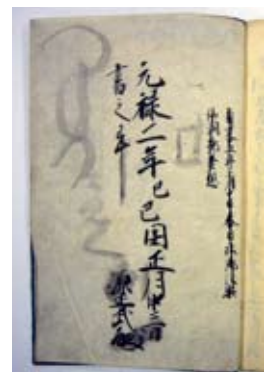


奥書を読む

奥書には書写奥書、本奥書、相伝奥書、加証奥書、校合奥書、伝授奥書等がありますが、特に書写奥書と本奥書(ほんおくがき・もとおくがき)の区別が重要です。書写奥書とは、ある書物を写した折の経緯(いつ、どこで、誰のために、誰の本をもとにしたのか等)を記したものをいいます。本奥書は、底本に記されている奥書、またはそれを写した奥書のことをいいます。例えば16の『伊勢物語』の奥書は書写奥書で、源正武が元禄2年(1689)の閏正月(陰暦では閏月というものがあります)13日に書写し終わったことが読み取れます。17の『玄々集』の場合、「天保九年…」以下が書写奥書で、橘正純が天保九年(1838)に正月下旬に「善本」を写したこと、そしてその「善本」は和歌が二行書で書かれていたことがわかります。「寛治二年(1248)…」と「正和第五之曆(1316)…」の二つの奥書は本奥書でになります。参考としてあげた版本にも同じ2つの奥書が見えます(当然のことですが、版本も写本をもとに作られていることがよく理解していただけたらと思います)。「本云」とは本奥書であることを示しています。ある本に記された奥書が、本奥書なのか、書写奥書なのか判断に困るものがありますが、その場合は奥書に書かれている年紀や筆写者とその書物の表紙や料紙等外形的な要素を比べて判定することになります。

16. 伊勢物語 袋綴2冊 元禄2年(1689) 源正武写

縹色地万字繫文様空押表紙21.0×13.8糎。外題、表紙中央香色題簽「伊勢物語 □□(破損)」。内題なし。料紙、薄手の斐楮交漉紙。毎半葉9行。字面高さ、約16.5糎。和歌1首1行書。墨付、53丁。後表紙見返しに「元禄二年(己巳)閏正月 中三日／書之畢 源正武〔花押〕」と書写奥書あり。源正武は未詳。「源正武」の署名の下に書かれた文様のように見えるものを花押(かおう)といい、書写者を明確に証拠立てるために用いられた個人を特定する符合、サインのようなもので、本奥書では、この奥書が似せて書かれたり、そこに花押があったことを示すために「在判」等と記される。定家本の勘物あり。初段から125段まで段数表示を付す。段数冒頭、歌頭に朱合点あり。また、朱墨の読点、墨の濁点が全冊にわたって見られる。



17. 玄々集 袋綴1冊 天保九年(1838) 橋正純写

布目地象牙色表紙26.6×18.7糎。外題、左肩子持柀刷題簽に「玄々集」と墨書す。内題、「玄々集／僧能因撰古曾部入道」。料紙、楮紙。毎半葉10行。字面高さ、序文約19.8糎、和歌本文約20.5糎。和歌1首1行書。墨付、25丁。遊紙、前後各1丁。本奥書「寶治二年暮春之天下句之比令書写畢／被催志之深不知老耄之及而已」「正和第五之曆暮春上句之依 令終書写之」(24ウ)について書写奥書「天保九年戊戌孟春天下句之比得善本令書写之／畢彼本書牀二行也無端詞者直書之今予闕文／俟善本而已 橋正純自書[花押]」(25オ)あり。橋正純は未詳。印記、「康童／藏印」(方形朱印、1オ)「須賀／叙乃」(方形朱印、前表紙見返し)。



『玄々集』は能因法師(988-?)撰、一条天皇から後朱雀天皇に至る時期の秀歌を歌人別に収載した私撰集。永承頃(1046-1053)の成立と推定される。

(参考) 玄々集 袋綴1冊 [江戸前期] 刊

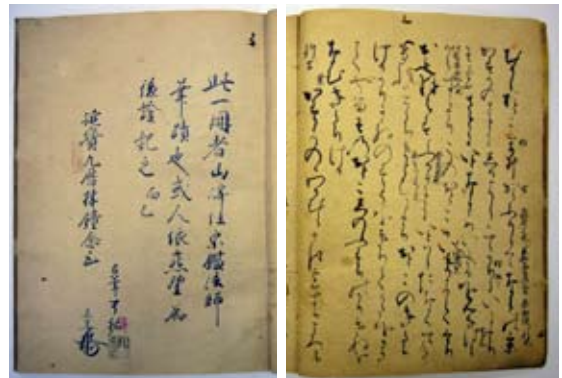
布目地浅葱色表紙19.3×13.2糎。外題、表紙左肩刷題簽「能因玄〔々集〕」(〔 〕内破損、墨書する)。内題、「玄々集 僧能因撰 古曾部入道」。料紙、斐紙。無辺無界、序文毎半葉6行、和歌本文毎半葉8行。字面高さ、序文約15.3糎、和歌本文約13.3糎。和歌1首2行。版心、「玄々 序(一～三十八終)」。墨付、38丁。刊記はなく、17と同様の本奥書「本云／寶治二季暮春之天下句之比令書写畢被催志之深不知／老耄之及而已」「正和第五之曆暮春上句之依／令終書写之」(38オ)あり。印記、「谷山／藏書」(方形朱印、1オ)

筆跡を見る

写本、特に古写本を見る楽しみは、その優雅な筆跡にもあります。18の『伊勢物語』は室町後期の連歌師、山崎宗鑑(やまざき そうかん)の手になるものです。宗鑑は本名(山崎は京都山崎の地に庵をかまえていたことによります)、出自、生没年等不明な点が多い人物です。北村季吟『菟芸泥赴』(第八・離宮八幡)に「宗鑑はもと支那孫三郎とて、公方家の右筆なりし者、出家して山崎にすむ」「平生傭出して(やとわれて)業とす」「一紙拾銭」とあり、書を生業としていたと伝えられていますが、確証はありません。ただ宗鑑の書写した少なからぬ伝本が残されているのも事実です。天野信景『塩尻』(巻七十六)には「能書の誉れ有て今世に手跡多くのこれり、俗に宗鑑書る物なら家は火災をまぬかるといへり」とも見えます。19の『伊勢物語』は本阿弥光悦、松花堂昭乗とともに寛永(1624-1644)の三筆に数えられる近衛信尹(このえ のぶただ、1565-1614、実は寛永まで存命していません)の手になるものです。信尹は後陽成天皇に仕え、左大臣、関白をつとめた公卿です。三藐院(さんみゃくいん)と号し、三藐院流(近衛流)という書道一派を起こしました。『伊勢物語』は各段落が「昔男…」ではじまりますが、「無閑新於止古」「無鹿子男」「六香子於東虚」などと漢字を使い表記して変化を持たせています。

18. 伊勢物語 綴葉装1帖 [室町後期] 写 [山崎宗鑑] 筆

支子色地草色菱万字牡丹唐草等文様緞子表紙14.2×17.5糎。外題なし。見返し、茶色地金切箔・砂子、霞引。内題はなく、本文を1ウより書く。料紙、斐紙。毎半葉10行。字面高さ、約20.8糎。和歌1首2行書。墨付、4折、77丁。遊紙、前1丁。巻末に根源本の奥書(73ウ～75オ)および武田本の奥書(76ウ)あり。さらに天福本の奥書にある勘物(万葉歌、古今六帖歌等の引用、77オ)あり。本文は武田本の特徴を示す本文を有するが、天福本とも近い本文を持つ箇所もある。宗鑑によると思しき墨書入の他、後人によ



る墨・朱の書入あり。

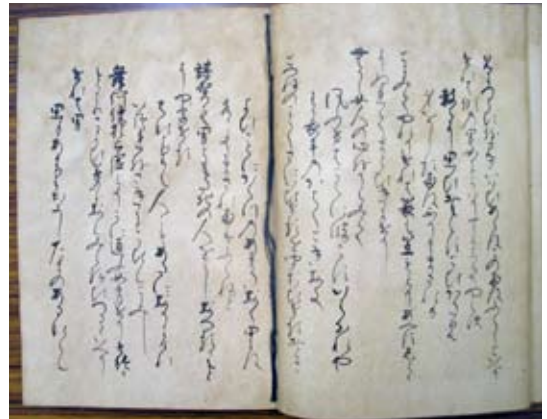
巻末に「此一冊者山崎住宗鑑法師／筆跡也或人依懇望 為／後證記之而已／延寶九曆林鐘念五〔了祐朱印〕〈古筆了祐〉〔琴山墨印〕 真空〔花押〕」と古筆了祐による極奥書あり。また、「正筆／一 山崎宗鑑伊勢物語／全部了祐様奥御極有／御加筆奉願上候」と記した薄い朱色の貼紙あり。了祐に鑑定を依頼した人物によるものか。

天理図書館にも山崎宗鑑筆『伊勢物語』が所蔵されている（池田亀鑑旧蔵）。同書も鶴見大学本と同様に根源本、武田本の両奥書を巻末に持つが天福本の勘物はなく、代わりに「以祖父卿真筆本不違一字書寫校合之可備證本矣藤為相」という奥書を有する。

19. 伊勢物語 綴葉装1帖〔江戸初期〕写〔近衛信尹〕筆

藍色地雷文繫牡丹唐草文様表紙30.2×20.3糎。表紙中央白緑色地金泥・墨草木下絵題簽「伊勢物語」。内題はなく、本文を1ウより書く。料紙、斐紙。毎半葉10行。字面高さ、約23.6糎。和歌1首2行書。墨付、5折69丁。遊紙、前1丁。巻末（67ウ～69オ）に根源本の奥書および武田本の奥書があり、さらに「右両本奥書追書加之乎」とある。武田本に近い本文を有するが、天福本に一致する本文も見られる。

近衛信尹の奥書はなく、極札等もないが、個性的な書風から推して信尹の筆跡と推定される。



蔵書印を見る

書物に捺された蔵書印から旧蔵者が判明する場合があります。同じ蔵書印の捺された書物を博捜することによって、現在ではばらばらになってしまった蔵書・文庫の全貌を再現することを目指します。書物1点1点の調査と同様に、蔵書・文庫の研究も重要です。20の『為尹千首』には「阿波國文庫」（あわのくにぶんこ）の蔵書印が捺されています。これは徳島藩主蜂須賀家の文庫の蔵書であることを示しています。その蔵書の主たるものは蜂須賀齊昌が屋代弘賢（1758-1841）との生前との約束で譲り受けた「不忍文庫」旧蔵本です（儒学者柴野栗山の旧蔵書も多いといわれています）。1の『山谷詩集注』をあわせてご覧ください。戦前徳島県立光慶図書館に保管されていた3万冊の阿波国文庫の蔵書は戦災でその大半が失われ、蜂須賀家別邸に移されていた分も戦後売却され、江戸時代以来の優れた文庫は消滅してしまいました。21の『水無瀬釣殿六首歌合』には田村宗永（建頭、1656-1708）の蔵書印（「芸叢／之印」「芸叢」「雀菴」）が捺されています。宗永は陸奥国一関藩の初代藩主。武家故実に通じ、和歌、絵画、書等を能くしました。現在、阪本龍門文庫に宗永の遺書約60点が所蔵されています。なお、『忠臣蔵』で有名な浅野内匠頭長矩は、江戸城内刃傷事件の罪で田村家の江戸屋敷に預けられ、即日切腹をしています。

20. 為尹千首 袋綴1冊〔江戸後期〕写（寄合書）

浅葱色地七宝文様繫刷表紙27.4×横19.8糎。外題、左肩金泥草花絵題簽「為尹千首」（本文別筆）。内題、「詠千首和詞」。料紙、斐楮交漉紙。毎半葉11行。字面高さ、約21.2糎。和歌2行書、歌題を約2字下げに記す。墨付、92丁。3、4筆の寄合書。遊紙、前1丁。奥書は以下の通り。「此千首可詠進之由去八月廿四日自／室町殿蒙仰同十月八日持参之／應永廿二年十月日」「〈私曰〉／為尹（マサ）者冷泉為秀男也應永廿四年／正月廿五日卒云々／室町殿者勝定院義持也」。応永22年の本奥書は諸本共通。応永二二年（一四一五）一〇月將軍義持の命により冷泉為尹が千首歌を詠進した由を伝える。「私曰」以下も転写か。千首末に「和歌の浦に玉もましらぬ／もしほ草いにしへ今の／かすをとめぬる」の一首あり。印記、「阿波國文庫」（巻首及び巻末）。

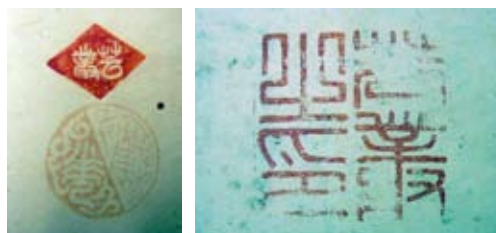
本書は『群書類従』（巻第百六十三）所収本と比べて歌順に相違が認められる。



すなわち、春部「春野」と「春関」、同「瞿麦露」と「夏瞿麦」、秋部「庵虫」と「庭虫」、同「河霧」と「浦霧」、同「澤月」と「沼月」、恋部「寄鴛恋」と「寄鴨恋」、同「寄筏恋」と「寄篝火恋」の歌順がそれぞれ前後する。

21. 水無瀬釣殿六首歌合 綴葉装1帖〔江戸前期〕写

老竹色表紙15.5×18.1糎。外題、金砂子打曇丹色短冊「水無瀬釣殿六首歌合」。内題、「水無瀬釣殿当座六首御歌合／建仁二年六月」。料紙、斐紙。每半葉13行内外。字面高さ、約13.6糎。和歌1首2行書。墨付、2折5丁。遊紙、後2丁。印記、「芸叢／之印」（方形朱印、1オ）「芸叢」（菱形陰刻朱印、遊紙）「雀菴」（円形朱印、遊紙）。



本歌合は、建仁2年(1202)6月、後鳥羽院が水無瀬に行幸の折、藤原定家と詠作し、帰京後後鳥羽院自ら結番し(院は藤原親定の名で右方)勅判した歌合。鶴見大学図書館には本書の他に室町後期の写しの伝本(『水無瀬殿恋十五番歌合』と合一冊)が蔵されている。